

万葉集の露草

露草

露草は、解説書によれば、月草、螢草、移草、藍草、帽子草、縹草（はなだくさ）等の別名があるようです。

漢名は鴨跖草（こうせきそう）と記されていますが、万葉集には、漢風に「鴨頭草（つきくさ）」と記された歌もあります。

漢語辞典によれば、「鴨頭」はアヒルの頭を表し、転じて「緑色」を意味するようですが、染色する色とは関係なく、「鴨頭草」は青色に染めるのに使われていたようです。

今から千三百年前、古代に布を染めるのに使われたことが万葉集の歌に詠み込まれています。

露草を分類すると、ツククサ科の中に、ムラサキツククサ、オオムラサキツクサ（以上、ムラサキツククサ属）、マルバツククサとツククサ（ツククサ属）とあります。ムラサキツククサ属は、北アメリカ原産ということですから、万葉集の時代には生息していなかったでしょう。

万葉集の時代の露草は、古来種のツククサ属の露草、つまり、マルバツククサとツククサです。

左の写真はどこでもよく見られるツククサです。きれいな青い花が特徴です。可憐な花ですが、露地に咲く草花で、野生味があります。三枚の花びらからなりますが、一枚の花びらは退色しています。

この「露草」は一年草で、花の期間は六月から九月で、日本各地で見られます。茎葉は乾燥して利尿剤にも用いられたようです。

露草による染色は、アントシアニン系の化合物が染料として作用するようです。

容易に退色するようです。後代、実際に染色に用いられたのは、

オオボウシバナ（アオハナ）という種だそうです。



万葉集の「露草」の歌

万葉集には露草を詠み込んだ歌が九首収録されています。原歌で検索すると、月草が五首、鴨頭草が四首、抽出されます。

「露草」の歌で注目すべきことは、九首の内、作者がはっきりしているのは、一首のみで、八首が作者不詳巻とも呼ばれる、第七卷(三首)、第十卷(二首)、第十一卷(一首)それに第十二卷(二首)に収録されていることです。まず、作者名がはっきりした唯一の歌(巻四・五八三)を掲げます。

第一首目の歌

この歌の作者は、大伴坂上郎女(おおとものさかのうえのいらつめ)の長女で、大伴家持(おおとものやかもち)と結婚した大伴坂上大嬢(おおとものさかのうえのおおとめ)です。

題詞に「大伴の坂上家の大嬢の大伴宿禰家持に報へ贈れる歌四首」とある第三首目の歌です。

▼つき草の移ろひやすく思へかもわが思ふ人の言も告げ来ぬ

「つき草」は原歌では「月草」と記されています。「わが思ふ人」とは大伴家持のことです。「つき草のように移り気だとしか自分を思っていないのではないのでしょうか。言葉もかけてくだらないのは」と。

これらの歌は、大伴家持からの便り(多分、歌でしょう)、に答えた歌ですが、万葉集にはそれらの大伴家持の歌は収録されていません。まさしく「露草」が染色に使用されていたことを示しています。それも退色(色移り)しやすい染料であったことを表しています。

第二首目の歌

次に作者不詳歌を掲げますが、まず第七卷に収録された歌です。

時に臨める

▼月草に衣そ染むる君がため綵色の衣摺らむと思ひて

この歌(巻七・一二五五)は古歌集から引用されています。

作者不詳歌なので、「君」が誰か推測のしようがありませんが、先に坂上大嬢の歌よりも古い歌であることは確かです。原歌では露草は「月草」と記されています。

坂上大嬢は、この歌を知っていたのではないでしょうか。露草を用いて、衣を染色していた様子が生き生きと描写されています。

「綵色」とは「色模様」を意味します。したがって均一に染色するのは難しかったのでしよう。「摺らむ」から「こすりつけて」染色していたのです。

染色の色模様は鑑賞に堪え、女性が男性のために衣を染めて贈ることは、恋の表現だったのです。

第三首目歌

次の歌（巻七・一三三九）も第七巻に収録されています。

▼鴨頭草に衣色どり摺らめども移ろふ色といふが苦しさ

この歌の「鴨頭草」は原歌も同じです。「移ろふ色」というのは、「退色しやすい色」という意味です。移ろい気に対応しています。坂上大嬢の歌に通じる「つきくさ」の用法です。

第四首目歌

次の歌（巻七・一三五二）も第七巻に収録されています。

▼月草に衣は摺らむ朝露にぬれての後は移ろひぬとも

この歌の「つきくさ」は原歌では「月草」です。

「朝露」に濡れて、色移りがすることを表現しています。（朝まで）会ったあとは、気が変わってもよい」と考えているのです。多分、女性の歌です。一夜の逢瀬に命をかけているのです。「移ろひぬとも」とは、女性の恋の強さを表していますが、まさしく「露草」の染色は、色移りしやすいことを示しています。

第五&第六首目歌

これら二首の歌（巻十・二二八一と同二二九二）は第十巻に収録されています。

▼朝露に咲きすさびたる鴨頭草の日くたつなへに消ぬべく思ほゆ

▼朝咲き夕は消ぬる鴨頭草の消ぬべき恋もわれはするかも

これらの露草はいずれも原歌で「鴨頭草」と記されています。

これらの歌は、これまでの歌と異なり、染色の意味はまったく含まれていません。その代わりに、「露草」の花のはかなさを恋に譬えています。朝に咲き、夕べには花を閉じる露草の青い花の習性を、見事に歌に詠み込んでいます。

「露草」は野生的で、生命力にあふれた野草です。しかし、花びらは朝に咲き、夕べには閉じる習性があります。種々の花の中で、露草のこの習性を、一層、はかなく感じたのです。

第七首目歌

次の歌（巻十一・二七五六）は第十一巻に収録されています。

▼鴨頭草の仮れる命にある人をいかに知りてか後も逢はむとふ

この歌の「鴨頭草」は原歌と同じです。

この歌は、第十一巻の「古今の相聞往来の歌の類（上）」の「物に寄せて思を陳べたる歌三百二首」の一首です。「鴨頭草」を「はかない命の人」に譬えています。これは、「うつせみ」のように命に限りある人間を表していると解釈されています。朝に咲き、夕べに閉じる露草を意識しています。「後で会おうといわれるが、明日の命はわからないのに」と相手の気持ちを受け入れられないことを虚無的に表現しています。

この歌も、染色とは関係ない表現になっています。

第八&九首目歌

これら二首の歌（巻十二・三〇五八と三〇五九）は第十二巻に収録されています。

▼うち日さす宮にはあれど鴨頭草の移ろふ情わが思はなくに

▼百に千に人は言ふとも月草の移ろふ情わが持ためやも

これらの歌の「鴨頭草」はそれぞれ原歌でも同じです。これらの歌は、第十二巻の「古今の相聞往来の歌の類（下）」の「物に寄せて思を陳べたる歌一百五十首」の二首です。連続して配置されていることから「つきくさ」の歌として編集されたはずで、第一首目の歌の「うち日さす」は「太陽が射す」の意で、「宮（宮廷）」に掛る枕詞として使用されます。「（私は）華やかな宮廷にいるけれども」の意です。両首とも「つきくさの移ろふ情」を詠み、「そんな心は思わないし、持つこともない」ときっぱり否定している歌です。したがってこれらの「移ろふ」は「染色した色が退色しやすい」ことを「心が移ろい易い」と対応させています。